

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	堀川 康平
論文担当者	主査 新村 健
	副査 藤岡 宏幸
	副査 岸本 裕充
学位論文名	The Pathophysiology of Sarcopenic Dysphagia: Consideration of Videofluoroscopic Swallowing Studies (サルコペニア性嚥下障害の病態 -嚥下造影検査による検討-)
論文審査の結果の要旨	
<p>サルコペニア性嚥下障害は、全身および嚥下関連筋のサルコペニアにより生じる嚥下障害と定義されるが、その病態は十分に解明されていない。そこで本研究では、嚥下造影検査（VF 検査）から得られる咽頭収縮率（pharyngeal constriction ratio：PCR）と舌骨前方移動距離（anterior movement distance of the hyoid：AMDH）に着目し、サルコペニア性嚥下障害の病態を明らかにすることを目的とした。</p> <p>対象は VF 検査を必要とした 65 歳以上の患者で、嚥下障害の直接的原因となる疾患や検査困難例を除外した 52 名を、サルコペニア性嚥下障害群 27 名と対照群 25 名に分類した。PCR、AMDH、咽頭残留量比率スケール（NRRS）、最大舌圧（MTP）、最大開口力（MJOF）などを比較し、群間差および相関分析を行った。結果、PCR はサルコペニア性嚥下障害群で有意に高く、咽頭収縮力の低下を示唆した。さらに、PCR は喉頭蓋谷および梨状窩の NRRS と有意な正の相関を示し、咽頭残留の増加と関連していた。一方、PCR と MTP や MJOF には有意な相関を認めなかった。AMDH はサルコペニア性嚥下障害群で有意に短く、舌骨前方移動距離の低下を示したが、NRRS や嚥下筋力指標との相関は認められなかった。これらの結果は、咽頭収縮力と舌骨前方移動距離の低下がサルコペニア性嚥下障害の病態を反映している可能性を示し、先行研究における仮説を支持する内容であった。本研究の限界として、対象者が連続サンプルではない点、群間の年齢差、VF 検査を 1 回の嚥下に基づき解析した点、二次元画像を用いた解析である点が挙げられた。</p> <p>以上より、VF 検査から得られる PCR および AMDH は、サルコペニア性嚥下障害の病態把握のための指標となり得ることが明らかにされた。本研究はサルコペニア性嚥下障害の病態理解における VF 検査およびそれから得られる指標の有用性を示すものであり、本研究の成果は、学位授与に値すると判断した。</p>	